

人間科学における エヴィデンスとは何か

現象学と実践をつなぐ

小林隆児, 西 研編著
竹田青嗣, 山竹伸二, 鯨岡 峻著

新曜社, 四六判 300頁, 3,400円, 2015年9月刊

(京都文教大学) 濱野清志

エヴィデンスに基づいた治療でなければ信頼にた
るサービスが提供できない, そうということが1990
年代から少しずつ言われはじめ, 現代では, 医療や
看護, 福祉の領域での研究にはしっかりとエヴィ
デンスを示すことが必須のこととなってきている。
心理臨床の領域でも, その関わりにどのような意味
があるのか明確なエヴィデンスをもって臨床実践を
行っているかどうか, それによって臨床の質は明確
に異なるものになるといつてよいだろう。しかし,
そのときのエヴィデンスとは一体どのようなもので
あるべきなのか。

評者は心理臨床を専門とする大学教員なので, 実
践としての心理臨床の現場の課題と, その学問的基
盤でもある心理学や臨床心理学の研究領域でのエヴィ
デンスの問題のつながりには強い関心をもってき
た。この領域では, 実践と研究のつながりはまだま
だ発展途上であり, 今も模索の途上であるが, 私た
ちが重要だと感じてきた方法は, 実践としての面接
法であり, その一つ一つの面接事例の検討, 事例研
究法である。では, 面接法, 事例研究法では何をそ
の方法のもたらすエヴィデンスとして研究や実践を
進めているのか。面接法や事例研究法は, 研究主体
が研究対象の中にもいて, 研究者自身という存在を
抜きに語ることはできない。参与観察というこのモ
ードから得られた知見は, 観察者の個性をそこに含
んでいるので, 知見そのものが常に個別的な知見で
ある。そのことの集積が, 学として成立するのはど
のようにして可能か。

そんなことを考えつついつも半ば袋小路に入り,
実証的な心理学研究法を使った論文を書くことを学
生や大学院生にすすめ, 一方で, それでは心理臨床
の研究にはつながらない, そんな自分の中途半端さ
にもどかしさを感じていたが, 本書はそういった私

の問題意識に正面切って明快な議論を展開してくれ
るものとなっており, 「そう, そうなんだ」とひざ
を打ちつつ, 一気に読んでしまうものであった。

竹田青嗣, 西研という二人の気鋭の哲学者と心理
学, 哲学領域での評論家として知られる山竹伸二,
発達心理学者として独自の視点を発信し続ける鯨岡
峻, そして発達障害の治療論を展開する児童精神科
医の小林隆児という一見すると異色の取り合わせの
面々が, 生きた人間同士のかわりを扱う学問的視
座が今の日本のこの領域の諸学問ではきわめて未成
熟であることで問題意識をともし, 西南学院大学
で行われた二つの講座を母体として出来上がったの
が本書である。本書では, エヴィデンスを「明証
性」という日本語で示し, そもそもエヴィデンスと
は何なのか, そしてそのエヴィデンスをつかまえる
方法として「本質観取」という方法論を取り出し,
フッサールの現象学に足場を据えて議論が展開する。
個々の議論にはそれぞれもっと聞きたいことや, 言
いたいことが生まれてきて, それこそエヴィデンス
をめぐる本質観取を全体を通しておこなった気にな
る, 絶対にお勧めの一冊である。

ピグル

ある少女の精神分析的治療の記録

ドナルド・W・ウニコット著
妙木浩之監訳

金剛出版, B6判 304頁, 3,200円, 2015年10月刊

(京都ヘルメス研究所/京都大学名誉教授) 山中康裕

この本は以前に翻訳出版されたことがあるが, あ
れはとても理解にほど遠いシロモノだった。それは,
訳者たちが, この種の治療の深さに理解が及んでい
ないだけでなく, 翻訳の基本的なことがらもクリア
ーされていなかったからである。現今の本書の監訳
をした妙木氏は, そのことにも相当好意的な意を用
いて書いているが……。さて, 前のモノについては
それ以上には述べない。本書が, とても贅沢なのは,
訳者の岡本亜美・加茂聡子・児島嘉子・吉村聡の4
人の苦闘の訳に加えて, 監修者の苦闘の跡がにじみ
出ており, その上, 妙木氏の懇切な解説があり, そ
の上に, ウニコッティアンの先輩の北山修氏が,